

糸魚川大火 「互いを気遣う関係」死者ゼロに

毎日新聞 2016年12月24日 19時42分(最終更新 12月24日 20時41分)

新潟県糸魚川市で22日朝に発生した大規模火災は、多くの高齢者が暮らす木造密集地帯約4万平方メートルを焼き、住民2人、消防団員9人が軽いけがをしたものの、死者は出なかった。長年にわたって地域で培われた「互いを気遣う関係」が、人的被害を抑えたのではないか。難を逃れた人たちは口をそろえた。【川辺和将】

JR糸魚川駅前のラーメン店から出た火は、強い南風によって北側に100メートル以上離れた二つの建物に飛び火した後、次々と燃え広がっていった。延焼が続く22日夕。火元の東側にある1937年創業の老舗「小竹（おたけ）海産物店」に足の不自由な60代の女性がやって来た。

「火が迫ってきたので、逃げてきたけれど、市役所の避難所は遠すぎる。自宅を近くで見守っていたいから、しばらくここにいさせてくれませんか？」

家族の思い出が詰まった家を見捨てることができない。そんな女性の願いを、同店を営む小竹慎太郎さん（46）は即座に理解した。市による避難勧告は知っていたが、店は風上だ。事務所を「避難所」として開放し、いざとなれば自分が安全な場所に誘導しようと小竹さんは考えた。

同じような思いを抱え、他にもお年寄り3人が事務所に訪れた。夜になっても消火活動は終わらず家に帰れないと判断した女性らは避難所に移ったが、事務所で石油ストーブを囲み不安を慰め合う時間を共にした。小竹さんは「ここで生まれ育った人間にとって町の人は大切な存在だから、困った時はお互い様です」と語った。

市の避難所に身を寄せた荒木一貞さん（76）は、最初に火事の知らせを受けた時「すぐ鎮火するだろう」と考えた。しかし、近くに住む女性から「役所が避難勧告を出したから、一緒に逃げよう」と言われ、家を出た。

自宅は被害を免れたものの周囲はほぼ焼け野原になった。「もう少し逃げるのが遅かったら、命を落としていたかもしれない。誰も死ななかったのは、ご近所同士の気遣いのおかげです」。荒木さんは振り返った。

延焼した地区の近くに店を持ち、両親と子供のころに暮らした生家を焼失した旅行会社経営の片山良博さん（40）も言う。「高齢化が進んでいる地域だけど、顔が分かる古くて小さな町だからこそ助け合うことができたと思う。大火で失われたものは多いけれど、災害で深まった人と人との絆が新たな街づくりにいかされることを願っています」